

浦島を乗せた龜に會つた話

河田 禮太郎

果しない大海原の水がさある小島の裾を洗ひ、島續きの丘に沿つて入りこんでゐる。入江の渚に沿ふてさながら人目を避ける如く、砂上に覆ひかぶさる様に立ち並んだ小屋は漁夫の住む家であらう。

ブウンと鼻をつく強烈な香の中に、ブンブンとかすかに聞えるはばたきの音は並べた乾魚に集ふ蟲の聲であらう。入江の片側の岡には青松の並木が續く。遙かに之を望めば人は何かしら遠い希望と幸福とを感じるであらう。折ふし聞える松風の聲に和して海女は一睡の夢をむさぼるであらう。

この松並木の盡きる所に半身を水にひたして小さな岡が立つてゐる。岩と土砂で出来上つたこの小丘の上は一面の竹篭が生ひ茂つて一樹の松が全身を抱く様にして地面まで垂れてゐる。この松の陰に一字の古びた祠がある。この小丘の頂に立つて遠く北の方を望めば、日本海の波がヒタヒタと迫つてくるのが感じられる。この小丘の先に巨岩大石が無難作に投げだされて海中にさつしりと腰を下してゐる。

×

澄之江の浦になつかしい水邊の祭が訪れてくるのは夏も酣の七月末のことである。此れが浦島神社の祭禮である。この楽しい行事をさりわけ少年少女達はざんに待ち焦れることであらう。貰ひためた御小遣が可愛い財布の中で踊りだすのはこの時である。親族ある者は招かれて客となる。

る。岩と岩との間、石と石との境、忍びよつた薄暗い海水の中に人の足音をききつけて、電光の様に姿を消す魚は何であらうか。

飛び石傳ひにわたつて行くと、僅かに水面に浮き出た岩疊が格構の釣場を提供してゐる。仰けば無限にひろがる青空、俯せば果しなきわだつみの底。

ぼつかりと一人の若者の顔が岩疊の上に浮んでゐる。一看佛像のうがははれる懐しい顔である。此處の岩角、彼處の水面に群れこぶ海鳥の一種無氣味なコーラスの中に若者は絲を垂れてゐる。

ドンドンと背の口からたき出す大鼓の音は、若き男女の胸もさきめかすのである。やがて灯ともし頃となれば近

郷近在から出た人の波は、鹽風涼しいこの水邊に吸ひ寄せられて立ち並んだ夜店の間を、思ひ思ひの歓聲をあげながら尋きあふ。ゆらゆらと水に映じて搖れる火影を追ふて音もなく小舟が消えてゆく。

ガランがランと鳴物入りで何やらわめく見世物のテント張りの柵からしきりごノゾキ見してゐる少年もある。この雑踏をのがれて、突堤に腰を下し乍ら静かに傍観してゐる人もある。

晝間の炎熱に今は静かに休息をとつてゐるかと思はれる海水の、黒々こまでも續いてゐる遙か彼方に點々こまばたく漁火を眺める人は、何かしら遠い希望を感じずに居ないだらう。

澄之江の浦

まことにその名の示すが如くあくまで澄みきつた水、白砂青松、淨土である。

凡そ二軒もあらうかと思はれる砂濱を渚づたひに歩いて行くと、所々に裸の子供達が思ふ存分水に戯れてゐる。船影一つ認められない水平線をながめつゝ、渚傳ひに散歩する愉快さはけだし此の世のものとは思はれない。

この澄之江の浦に前代未聞の椿事が起つたのは夏祭が近

づいたある日のことであつた。

海龜がされた!!

この驚くべきニュースが話題に窮した近郷近在の人々を驚喜せしめたことは言ふ迄もない。その丈三米にも餘る一匹の海龜が突然訪れたのである。

この驚嘆すべきニュースは村人の口から口へ、耳から耳へと潮の如くひろがつて行つた。一期の思ひ出にこの龍宮の乙姫様の御使に見えんものと押し寄せる人達の列が、来る日も、来る日も長く續いて行つた。

浦島太郎をまつる祠の傍に設けられた生洲の中にぢつと動かない海龜の姿を金網の上から見下しながら、人々はおぼろげながら幻と現實との交錯を心に感じて大きく目を瞠つてゐる。鉄砲弾丸も彈きかへすかと思はれる様な甲羅には苦が生え、そこここにカキがくつついてゐる。

海龜は恰もその運命を大いなるものに委せきつたといふ風にデッて觀念して、戯れる魚の群を尻目に動かさしない。生きてゐるのか死んでゐるのか、聲も立てないので一向知れないのである。

やがて濱邊のそこそこに飛び交ふ赤蜻蛉の群が見られる頃となつた。諸近くの水の中をほの白く彩つて、クラゲの群が海水に入る事を拒むのである。秋は何時のために忍びよつてきた。秋は海を渡つてくるのであらうか。彌が上に

も澄みきつた空氣は、人々の頭を冷靜にしたのである。

海龜の始末を一體どうしたものであらうか。この議は漸く本格的となつて來た。議論は三つに分れて、都の商人に賣り渡して村の收入にせんさするもの、小學校に寄附して教材にして貰ひたいといふもの、最後は海に放つてやりたいといふもの。

遂に最後の同情派が勝を制して、いよいよこの海龜を海に放つてやることとなつた。

昭和某年某月某日は世にも珍らしい仕事が行はれる事になつたのである。しばしの棲家の生洲を出た海龜は今しも渚近くの砂上に運ばれて來た。此の千載一遇の珍儀式にはんもの、又一つにはこの龍宮のお使に別れを告げんもの、優しい心根の人達によつて海も渚も丘も埋められて了つた。

あたりはシンとして衰へた初秋の陽光が今しも龜の腹に巻きつけられた純白の漂木綿に反射してゐる。年長の一人の漁夫がその白布を解いて一人の人夫の腹に巻きつけてゐる。それが終るごと、用意の酒盃が龜の口に運ばれる。今一人の年上の漁夫が、うやうやしくそれを捧げてゐる。竝居る人々は等しく心の中で、萬年の長壽を念じたことであらう。

やがて儀式も終つて臺に乗せられた龜が、水際に運ばれて來る。スルツ、スルツ、スルツ、こ龜は磁石の様に海水

に吸ひ寄せられて行く。

瞬間、ハツカ並居る人達の心をかすめて感情の稻妻が走つた。ミ思ふ、龜は既に舟底を潛りぬけて海中深く馳せて行つた。實に矢よりも速く龍宮さて走り去つたのである。群集一語を發する者もなく唯心の中で、左様なら、左様なら、ミ叫んでゐるばかりである。その念波は通じてか龜は遙か彼方から水面に首をもたげ振り返つた。左様なら有難う。ミ言つてゐるのであらう。

ふ々氣つくミ鈍い樂の音が流れてくる。實に間がぬけたミいふ感じである。校長先生を先頭に小學生バンドが小舟に乗つて奏樂を始めてゐたのである。

X

私は不幸にして龜を海に放てゝ主張した人の名を聞きもらして了つた。龜の命乞ひをした昭和の浦島太郎は果して誰であつたらうか。

斯くて乙姫様の御使は無事龍宮に歸ることが出来た。乙姫様に一部始終を報告した龜はやがて昭和の浦島太郎をお迎へに再びこの浦を訪れるであらう。私はそれを心ひそかに待ち望んでゐる。これは私一人であらうか。

昭和の歌人は長歌を物して後世に之を残すであらう。

〔附記〕澄之浦は丹後國竹郡網野にあり、その昔浦島太郎が釣糸を垂れたといふ岩壁は釣溜と稱して今も殘る。土地の人は浦島神社として彼を祠つてゐる。